

2019年度自己評価結果公表シート

本園の教育目標

キリスト教信仰に基づき、幼児一人ひとりを大切に親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。
(施設の目的及び運営方針)

第2条 この幼稚園は、幼稚園型認定こども園であって、「日本基督教団信仰告白」に言い表されたキリスト教信仰に基づき、学校教育法第22条及び第23条に基づき幼児を保育し、適当な環境を与えて、その心身の発達を助長することを目的とする。

2 本園は、社会の期待や願いに応えられる創意と活力のある保育活動をすすめ、園児・保護者・地域に信頼されるよう努めるものとする。

3 本園は、安心・安定した情緒と落ち着いた保育環境の中で、健やかで豊かな心と体が育つよう保育を行うものとする。

4 本園は、子育て支援と対話・相談を大切にし、親と子の育ちの場となるよう努めるものとする。

神様の守りと導きの中で、自らも子ども達から学び、共に生かされていることを喜び祈りをもって行う。子ども一人ひとりに対して丁寧に対応し成長を願う。縦割構成の保育には高度な配慮と保育者の資質が求められるので、保育が自己満足・マンネリ化に陥らぬように日々の実践を通して常に見直すように努める。

1. 本園の保育の再確認

ア. 毎朝聖書を読み教育理念・方針、キリスト教に基づく保育について学び、園長を中心に教職員で話し合っ作成した「年間指導計画」に従って毎日祈りつつ保育を行った。保育計画も朝と保育後の教師会で教師全体で話し合い、子ども一人ひとりに配慮した保育計画を立て実践した。また、その月の願い・聖句などを全員で学ぶ時間をとり、共有し、それをもとに、各担当が月案を作成するという形をとったので、共通の願いのもと、保育にあたることが出来た。

また、子ども一人ひとりの育ちをより具体的に受け止め、多角的に知ろうという意図のもと、教師会とは別に、週に一度、個々の子どもの姿・育ちについて出し合い話し合う“のぞみ会”を今年度も行うことが出来た。参加した全員の保育者が、子どもの姿・成長の気づき等を出し合い、保育者の子ども理解を深め、次週以降の保育の手立てを考えあう時となった。また、保育者が増え、複雑化した保育者のシフトや動きも確認しあい、スムーズな次週への保育へとつなげることが出来た。

イ. 今年度は園舎の増築工事（2歳児保育室の増築）が4月から8月の予定で行われた。保育をしながらの工事となり、園庭の遊べるスペースが通常の下分に制限され、保育室が一つ使えなくなるなど、大きな影響があったが、子どもの安全とゆたかな生活を最優先に保育計画を練り、実行していくことが出来た。具体的には、プランターを使った栽培活動を積極的に取り入れたり、散歩などの園外保育、近くの教会の畑を借りての畑の活動や庭に絵の具を出してのダイナミックな絵画遊びなどを行った。

また、ホールの一隅に保育室を作り、新しい空間としてお部屋での集まりを行った。自由遊びの際にもホールは従来通り利用したが、子ども同士の距離がより近くなったり、すぐ近くに遊びがあり、

遊びに入りやすくなるなどの良さも生まれた室内での保育空間となった。また、保護者の方にも工事に伴う“さみだれ降園”など沢山の協力を得、予定通り8月には園舎が完成し、奉獻礼拝を8月11日に献げ、2学期から通常通りの保育となった。

一方、他県で起きた散歩中の交通事故を受け、散歩マップを製作し散歩コースの見直しをした。危険箇所の洗い出し・市や警察への危険箇所の伝達及び改善の要請など、安全に関する手立てを入念に行った上で、引率の人数を十分に配置し園外活動を行うようにした。また、保育中のヒヤリハットを教師会で定期的に共有しあうなど、安全面をより意識した保育を心掛けた。

- ・ 昨年に引き続き、ブログや各クラスのクラスだよりにて子どもの育ちあう姿を発信した。
- ・ 2歳児教育・保育（クローバーの部屋）では、個人差が大きく、育ちの葛藤をくぐり抜けて自立の芽生えが育つ成長過程の子ども一人ひとりに対してより添った丁寧な保育が行われた。

教育（認定外こどもと満3歳になった1号こども）と保育（3号認定こども）合わせて22名という今までで最多の保育となったが、増築後は、広くなった保育室をパテーションなどで必要に応じて空間を分け、多様な子どもたちの成長に対応する保育を心掛けた。子ども一人ひとりの自己肯定感・友だちと一緒に心地よさの体感・遊ぶ力の育成に努めた。

- ウ. 学期ごとに保護者会を行い、ご意見を聞かせていただいたり園の方針、行事について具体的に子どもの姿を通してご理解いただいた。

2. 園の施設、設備、遊具等の安全点検、施設設備の総点検

- ア. 2歳児の部屋第5保育室・第6保育室を増築した。2歳児の庭も作り直し、新しい砂場を作った。幼児ぐみの庭の整備も行い、子どもたちが活動しやすい場所に、大型遊具を配置しなおし、ウッドデッキは劣化していたため、新しく作り直した。各保育室と2階との吹き抜けに防音ガラスを取り付け、2階と1階の活動がそれぞれ音を気にせず行えるようにした。照明を、LEDにすべて交換した。

- イ. 火災による避難訓練だけではなく、大規模地震を想定した訓練も行った。

また、大災害を想定し、保護者に迎えに来ていただく“引き取り訓練”も昨年に引き続き行った。昨年実施できなかった2階に全園児がいた時の避難訓練を、今年を行うことが出来た。

これからも繰り返し行っていきたいと考えている。

- ・ 避難用具として、非常用トイレ・発電機を購入した。又、2歳児の人数増加に伴い、誘導用ロープをもう一つ購入した。

- ウ. 運動的活動は、上記にあるように工事に伴う園庭・室内の利用場所の制限の中で思うようにできないこともあったが、1学期は、一階ホールでの運動的活動（巧技台・跳び箱・トランポリン・マット・平均台などを使った運動遊び、大縄跳び、一人縄跳び）を、日常的に行った。

2学期になり園庭が使えるようになったあとは、例年以上に、リレーやサッカーなどの遊びが盛り上がり、暖冬の影響もあり、戸外で思う存分身体を動かして過ごした。年長児の絵画製作や聖書の学び、集まりなどでは、2階ホールを沢山利用し、有効な時間を過ごせた。また、自由遊びの中で、室内での遊びと屋外での遊びを子どもたちが自由に選択し、同じ時間内での中・外遊びを、行うようにしたため、それぞれの子どものやりたい遊び・保育者が願った活動を、より自由に積極的

に行うことが出来た。

3. 子育て支援、家庭支援体制

子育て支援として行っている「こひつじ広場」を、昨年に引き続き、教育的効果を考えて満1歳～2歳、2歳～就園前と2グループに分けて内容を充実させて保育を行ったので、その効果を大きく見ることができた。

4. 保育者の質の向上、研修の充実

教師間の話し合いや研修会に積極的に出席し学んだことを伝達し取り組むようにした。10月には、小野晃男先生を迎えての園内研修を行い、自分たちの子どもの捉えや保育者の積極的な願いと出について学ぶ時となった。今後も、子どもの捉えや子どもの自主的な動きを待つ保育における保育者の積極的取り組みについて学びたい。また、定着してきた“のぞみ会”という形の保育者の相互研修の中では、より深める子どもの捉えの共有や保育者のかかわりについてのディスカッションが出来た。

「キリスト教保育」の質の向上を図るために、今年度も部屋の礼拝で、担任が、その月の聖書の話をも、子どもたちに語った。聖書を何度も読んで、聖書から学び、子どもの前で語り、子どもたちと聖書の世界を共有するゆたかな時間を過ごす事が出来た。

5. 小学校との接続期の保育・幼小連携のあり方の再確認

卒園児が進学する小学校へは、指導要録抄本を提出し、幼保小連絡会に本園から必ず出席している。入学する前に、進学する小学校に、園での姿や様子を観ていただく必要があると思われる園児に対しては、担当する教諭等に来園してもらい、園長、主任、担任が面談し理解を深める機会をもった。

また、近隣の小学校の3年生の1クラスより、交流したいとの申し出をいただき、年に3回の交流の時を持った。中には卒園児も居て、小学生と幼児という年齢や経験の差をお互いに受け入れあいながら、楽しい交流の時間となった。小学生の姿に心を動かし、吸収し、小学校生活への前向きな関心が子どもたちの中に育った。